令和７年度　第１回秋田県生涯学習センター運営委員会　議事録

期日：令和７年７月１６日（水）
時間：１０：００～１１：４０
会場：生涯学習センター視聴覚室

１　開会

２　所長あいさつ

当センターは、県民の皆様の生涯にわたる学びを支え、職員の資質向上を図るとともに、市町村や関係機関・団体の皆様と連携しながら学びと活動をつなぐ役割を果たし、持続可能な地域づくりに貢献していくことを使命としている。今後も県民の生涯にわたる学びを支援し、持続可能な地域づくりに貢献するという当センターの使命を果たすとともに、施策や事業を効果的かつ効率的に進め、県民の皆様の期待に応えていきたい。運営委員の皆様には、当センターの適正で円滑な事業の推進のため、忌憚のない御意見や御助言をお願いしたい。

３　生涯学習課長あいさつ

当センターは昭和55年の開所以来、生涯学習に関する調査研究の拠点、県民への学習機会提供の拠点として、本県の生涯学習の振興に寄与してきた。近年では特に障害者の生涯学習や地域の防災、市町村への「熟議」手法の展開など、様々な取組に力を入れているほか、北海道・東北地区の各道県の生涯学習センターなどとも情報を共有しながら、事業実施における協力関係や交流を深めているところである。

さて、本県では今年度から令和11年度までを期間とする第４期あきたの教育振興に関する基本計画に取り組んでいる。この計画の基本方針５「子どもたちの豊かな学びを支える教育環境の構築」においては、学校・家庭・地域が、連携・協働し、地域社会全体で子どもの成長を支える体制を構築し、家庭教育支援の充実に取り組むこととしている。また、基本方針６「誰もが生涯にわたり学び続けられる環境の構築」においては、生涯学習の機会の充実や、地域コミュニティの活性化に向けた社会教育の推進に取り組むこととしている。当センターの取組は、その一つひとつが、こうした基本方針の具現化に資するものであり、市町村への普及・啓発・定着等に向けて、全県を視野に入れて展開しているものである。生涯学習課としては、本日の運営委員会での協議内容をもとに、生涯学習センターの多様な取組をさらに充実させていくための方策や、これまでセンターが蓄積してきた事業の成果を次の世代につなげていくための方策に積極的に取り組んでいきたい。そして、今後も利用しやすいセンター、頼りがいのあるセンターだと、県民の皆様に感じていただけるように様々な環境整備に努めてまいりたい。

4　出席者紹介及び資料確認

5　案件

（1）前年度の事業報告と今年度の主な事業計画について

①学習事業チームリーダー

・スライドを使いながら、令和７年度実施事業等について説明

当センターは、「持続可能な地域づくりの実現」を目指し、シンクタンク機能、研修・人材育成機能、学習活動・情報発信機能の三つの柱で事業を有機的に機能させて推進している。特に、障害者の生涯学習、防災、「熟議」による地域づくりを事業の核としている。

具体的な活動として、以下の取組が報告された。

②各担当から

・障害者の生涯学習に関する調査研究

今年度も障害者の生涯学習の推進とつながりづくりをテーマとして調査研究事業を行っていきたい。実施にあたっては、市町村、特別支援学校、民間企業、障害者支援施設等と連携・協働しながら進めていきたい。今年度は、取組の柱として２点に重きを置いている。一つは、学びの充実と新たなジャンル開拓に向けた取組であり、昨年度に引き続きモルックの研究を進めていく。もう一つは、新たな学びの場の検討を進めたい。内容としては、聴覚障害をテーマとした学びの場づくりを行っていきたい。さらに、12月７日には、６回目となる「あきたwith杯ボッチャ交流大会」を予定している。多くの皆様のご参加により、交流を深めていただきたい。

・ツドウベースの活用

昨年度からセンター内に「ツドウベース」を作り、障害者の生涯学習の理念に合致した活動を展開する団体や個人に利用していただいている。これまでの主な利用として７月６日には「モルック体験交流会」を新たな試みとして実施した他、障害者の自主学習グループが「味噌づくり体験会」を実施するなど、障害者の生涯学習の理念に基づいて、共生社会の実現に寄与することを目的に学習活動を展開する団体及び個人に対しての活動の場として提供している。昨年度は、延べ2,000人以上の方にご利用いただいた。今年度の調査研究事業のテーマである障害者の生涯学習の推進とつながりづくりに向け、連携・協働による学びの場づくりと、新たな学びのジャンル開拓につながる取組の創出をさらに目指していきたい。

・市町村・公民館等職員専門研修、研究大会

当センターでは、持続可能な地域づくりを目指す研修、支援を推進している。その中で、市町村公民館等職員専門研修として、今年度も３回の研修を計画しており、１回目は、モルックとボッチャの体験を中心とした研修を、２回目は、アウトドア防災と避難行動支援についての研修を、３回目は、日本ボッチャ選

手権出場者の齊藤悠人さんをお迎えし、車椅子の視点での街歩き体験を中心とした研修を予定している。今年度も、市町村・公民館をはじめ、社会教育関係機関・施設及び関係主体の持続可能な地域づくりの取組に資する研修となるよう、内容の充実を図っていきたい。

・家庭教育支援指導者等研修

県内には10市２町に計19の家庭教育支援チームがある。そこで、全ての保護者が安心して家庭教育を行うことができるように、チームの中核となるリーダーと、地域の人材としてチームの活動の中心となるサポーターの養成を目的とし、年４回の研修会を実施している。実際には、５月に「地域のつながりで家庭教育を支えよう」をテーマに１回目の研修を、そして、７月10日には、「保護者と子どもをサポートするために支援チームができることを考えよう」をテーマとして、２回目の研修を実施した。今後も県内外から各分野の専門家を講師に迎え、参加者の皆さんの意識や行動の変容につながるような研修を計画していきたい。

・オーダーメイド型社会教育主事派遣事業

昨年度と同様、「学校・家庭・地域連携総合推進事業」にかかるオーダーメイド型社会教育主事派遣、そして、今年度からの新規事業である「学びを通じた地域づくり・プラットフォーム構築事業」として、障害者の生涯学習支援モデル事業にかかるオーダーメイド型社会教育主事派遣の二つを実施している。内容については、依頼のあった市町村・県立学校の実情に応じて、各種研修会や「熟議」などを実施し、横並びの関係を構築しながら将来的に依頼元が自走できるようになることを視野に入れ取り組んでいる。

・あきたスマートカレッジ

今年度は無料講座が18、有料講座が８、合わせて26講座を提供している。当センターとしては、特に、地域課題、現代的課題に迫る「障害者の生涯学習講座」や「防災講座」、持続可能な地域づくりを目指す「熟議ファシリテーター講座」に力を入れ実施している。なかには定員を超えている講座もあり、多くの県民の皆様に関心を持っていただくとともに、10代から80代までの幅広い世代の方々が参加され、非常に魅力的なものとなっている。重点として示しているこの３つの講座が、各地域において、また、様々な組織の中で、核となる人材を育成するという観点から、価値のあるものとしてつくり上げていきたい。

・展示スペース活用

当センターでは、県民の生涯学習振興に資することを目的とし、１階エントランスホールと地下ホールで、学びの成果を紹介したい団体・個人を募集し、日ごろの活動や学習の成果である作品等を展示している。昨年度は、１個人６団体から希望があり、約12,000人の来館者の皆様に種々折々の展示を御覧いただいた。今年度も多くの展示計画が予定されており、出展者の要望にできるだけ沿いながら、様々な展示を実施したい。

・総務（施設の利用状況等）

昨年度の施設利用人数は、総計62,634人で、前年度から7,141人減少した。新型コロナウイルス感染症の五類感染症移行後の令和５年５月から、利用人数は、徐々に回復傾向にあったものの、エアコン不調による貸館利用停止等が減少の主な要因である。現在は、レンタルエアコンの導入などで対応している。施設設備については、築45年が経過しているが、県の公共施設は60年活用することを目標としているため、向こう15年間は当センターを維持していく必要がある。経年劣化による屋上の雨漏りや外壁の落下の恐れ、設備の劣化等による冷暖房の機能低下など、施設設備全体の老朽化が著しく、近年厳しい対応が続いているが、バックアップ用としてのレンタルエアコンを導入するなど、利用者の皆様に安心で安全に御利用いただけるように取り組んでいきたい。なお、昨年度も話題になった貸館の申込みの電子申請、使用料のコンビニ等での決済については、費用等の問題から実現が難しい状況である。

（２）その他（質疑応答・意見等）

・Ａ委員：　「デフリンピック応援イベント」に参加した際に、苦労した点や工夫したことは。

→言葉が通じないもどかしさもあったが、表情や身振り手振り、そして気持ちで伝えようと努力した結果、感情は共有できたと思う。専門的な手話の知識がなくても、感情や表現は問題なく通じたと思う。しかし、細かい指示など具体的な内容については、伝えるのが非常に困難で、その際には、手話通訳士の助けが必要であった。予想できる場面については、準備が可能だが、全てを準備することは難しいので、最終的には、気持ちが通じれば理解し合えると感じている。

・Ｂ委員：　展示スペースの活用については、どのように募集しているのか。

→主にホームページと窓口でのチラシの配布という形で告知を行っている。過去に展示した方々が、２～３年おきに、展示を続けてくれるケースや、展示を見た人が「自分もやれるのではないか」と、自ら連絡してくるケースも多い。今年度最初の和紙人形の展示では、神奈川県在住の方が、秋田市内で生産されている和紙を使用している縁で、神奈川からわざわざ秋田まで来て展示を実施した。これらの事例から、「皆さんの御縁とか、つながりなどがあっての展示」と捉えてほしい。

・副委員長：　生涯学習の発表の場が非常に重要であり、人の出会いや交流の場となっているこのセンターが、より多くの団体等に呼びかけ、これからも展示スペースの活用が進むよう願っている。

・Ｃ委員：　あきたスマートカレッジの「障害者の生涯学習講座」は、障害の有無に関わらず受講できるとのことだが、実際には、どのような方が受講しているのか。

→受講者については、障害のある方もない方も申込みいただいている。みんなで学びを楽しむということをコンセプトにしているので、障害

の有無にかかわらず、当センターに来て、みんなで交流して学びを深めてほしいと思っている。

・Ｃ委員：「県庁出前講座」で昨年度の実績がないのはどうしてか。

→メニューにある「生涯学習支援システム活用入門」は、市町村の生涯学習課職員などを対象に、情報発信の方法などについて、別に研修を行っているため、出前としての利用はない。「インターネットの健全利用」については、インターネットに関する相談が多く寄せられ、会話や話合いを多く取り入れた研修会として出前講座の枠組みにとらわれず実施しており、その形式が、県庁出前講座の実績としてはカウントされないためである。オーダーメイド事業の中で、小学校で親子向けのインターネット講座を行うなど、インターネットの健全利用については、近年は多くの要請がある。

・Ｃ委員：マナビストの単位認定について、昨年度、新たに認定された人はいるのか。

→昨年度は、1,900単位認定の申請が１件あった。また、単位認定を希望しないものの、自身の学習記録として手帳を活用し、熱心に学んでいる人も多い。

・Ｃ委員：「障害者の生涯学習講座」の定員が20名と比較的少ないが、20名を超えても参加できるのか。

→テーマや内容によって若干異なるが、人気のあるヨガ講座などは、講師が参加者一人ひとりに目が届くようにと20名に設定している。なお、他の講座については、定員数を超えても要望があった場合には、講師と相談しながら対応している。

・Ｄ委員：センター独自で開発した「熟議」は、とても好評のようだが、素人には難しいファシリテーションのコツ、また、話合いを円滑に進めるための工夫や問いかけ方について教えてほしい。

→話す時間を非常に大切にしている。ポイントは、少人数にすること。具体的には３～４人程度がふさわしい。そして、話合いでは、否定せずに受け止めることを非常に重視している。これは、「相手の意見に100％賛同して受け入れる」ではなく、「そういう考えもあるんですね」と「受け止める」ことである。ファシリテーターとしては、参加者が「自分ごと」として考えられるように言葉を返したり、話全体の構成を工夫したりしている。例えば、「できないからしょうがない」という意見に対して、「じゃあ自分たちに何ができるのか」という問いかけに繋げるように意識している。否定せずに楽しい雰囲気を作ることで、人は自由に話し始める。型にはめすぎないことが重要である。

・副委員長：生涯学習奨励員は専門的な学びだけでなく、多様な学習に取り組んでおり、成果を求めるよりも「やってみようかな」という「きっかけづくり」や「プロセス」を大事にする活動を目指している。プロセス

を評価する文化を育むことで、地域づくりに貢献したいと考えている。

・Ａ委員：学習事業チームとは別に「読書推進チーム」というものがあるが、どのような活動をしているのか。

→このチームは、センターではなく生涯学習課内にある。読書推進活動については、成人向けの読書推進を、文化振興課が担当しているが、読書推進チームは、子ども向けの読書推進に力を入れている。小学校ではビブリオスピーチワークショップ、中学校・高校生向けには、ビブリオバトル大会といった啓発活動を行っている。また、県庁出前講座では、「読み聞かせを楽しもう」を担当しており、職員が出向いて読み聞かせを行い、親子で本に触れる大切さを伝えている。

・Ｄ委員：「熟議」の講座を受講した人が実際に地域で実践し、成果に結びついた事例はあるか。

→「熟議」では、まず体験を通じて「熟議」の進め方やスライドの作成ポイントなどを学んだ後、参加者それぞれが、「どのような話合いの場を作りたいか」というテーマを持ち込み、個別に相談を受けながら、スライドや資料を作成している。講座終了後には、個別のスライドが完成するので、それを実際に活用し実践している。運営委員のＣさんのように、実際に「熟議」を地域で実施し、その様子を報告してくださる方も多くなっている。

・委員長：「熟議」の講座は、焦点をどこに当てているのか。

→「熟議」は、市町村職員だけでなく、多様な人が研修等に参加できるための工夫、そして、最終的には、受講者が一人でもファシリテーターとして実践できるようにすることであり、各市町村が事業等で自走するための人材育成であると思っている。信じて任せる、信じて託すことがポイントであり、たとえ困難なことがあっても、人を信じて任せることで、活躍するファシリテーターが増えるとの思いで活動している。

・Ａ委員：子育て等で一人で悩んでいるお母さんや、老後を不安視しているひとり暮らしの高齢者の方などに、手を差し伸べたいとなど、助けてあげたいけど助けられないという点に、もどかしさを感じている。支援を届けたいけど届けられない人に対してどうすればいいか、私も含めてこれから一緒に考えさせていただきたい大きなテーマの一つである。

・Ｂ委員：生涯学習センターの活動は、入口から出口までを網羅しており、とても参考にさせていただいている。

・Ｄ委員：教養分野だけでなく、地域課題に対しても積極的に支援するなど、県民に必要とされる学習機会を提供している生涯学習センターであるが、なんといっても、設備の老朽化が気になる。予算が限られているなかで、いろいろ工夫されて管理しているが、利用者のためにも、安

全面も含めて、どうにか予算を工面し、整備していただきたい。

・Ｃ委員：利用者の一人として、施設の老朽化は気になるところであるが、センターは５年後に半世紀を迎えることになる。予算の問題もあるが、全国に先駆けて建設されたセンターでもあるので、50周年記念事業を実施してほしい。また、とても中身のある研修や講座が多いので、多くの県民の皆様に参加していただくように、ＰＲに努めていただきたい。ただ、最近は利用者の口コミも重要視されているので、私自身もセンターの良さを広めていきたい。

・副委員長：将来は､やがてＡＩが人間を超えるのではないかと言われているが、現時点で私たち人間がＡＩよりも勝っているのは感情だと言われている。その点では、常に学び続けるという生涯学習は、なくしてはならない活動であると思う。その生涯学習の拠点である生涯学習センターには、これからも多彩な情報を届けて頂き、安心して学べる場、気軽に相談できる場、仲間と集いながら絆を深められる場として、継続的な事業を進めて欲しい。

・委員長：センターの事業の動きを見ていると、生涯学習の領域を広げるのがすごく上手だと感じている。障害者の生涯学習を始め、家庭教育の福祉分野や防災等、教育分野ではないと言われそうなところも、うまく生涯学習につなげており、広がりをもたせている点に感心している。しかも、自分たちも楽しみながら、対象に合わせてハードルを上げ下げしながら綿密に計画されている。また、最近は、社会教育の概念が徐々に変わってきていると感じている。学校教育以外が社会教育と思われているが、地域基盤としての社会教育という面が非常に強くなっており、人づくり、つながりづくりに重点が置かれた事業が展開されているところがセンターの強みであり、感心している点である。

6　所長あいさつ

委員の皆様からは大変貴重な御意見、御提言等をいただき感謝申し上げる。委員の皆様から、当センターへの大きな期待を感じた。その思いに応えられるよう、これからも全力で努めてまいりたい。業務を見直し、続けるべきものはさらに充実させ、県民にとって、楽しく学べる場をつくって参りたいと考えている。今後とも御支援を賜るようお願いする。

7　閉会